

健康教育教材の試用と今後の課題：
パキスタンの小学校での試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 清史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00024958

健康教育教材の試用と今後の課題

——パキスタンの小学校での試み——

鈴木 清 史¹

1 はじめに

健康であることは生活を営むうえでの基本である。わたしたちの周囲には、健康にまつわる多様な情報があふれかえっており、健康については否応なく意識させられるような状況がある。そのため、多くの人は健康にかかわる情報や知識を常日頃から収集するし、その知識を実践したりする。

人びとの健康意識を高め、健康的な生活を実践するよう働きかけることを一般的に健康教育という。日本健康教育学会の見解では、健康教育とは「一人一人の人間が、自分自身や周りの人々の健康を管理し向上していけるように、その知識や価値観、スキルなどの資質や能力に対して、計画的に影響を及ぼす営み」である[日本健康教育学会ホームページ]。また、世界保健機構（WHO）によると、健康教育は個人や集団あるいは地域全体が、健康を達成するのに必要かつ有益な保健にかかわる知識、価値基準そして実践ができることを目的として、人びとに提供し実感できるための計画的活動である[ブリタニカ国際大百科事典]。つまり、健康教育とは、知識の習得だけでなく、それによる自己判断と実践能力を持つことも含むことである。

健康教育は人びとの年齢とは無関係に実行できる。しかし、幼児期以降、家庭内や学校教育を通して、健康にかかわる知識を習得させることが望ましいとされている。それは、健康への意識が、その後の各人の生活習慣に反映できるようになると想定されているからである。そのために、たとえば我が国の学校教育では、さまざまな試みがなされてきている[文部科学省 学習指導要領]。

小学校教育に始まる健康教育は、普段の生活の実際の場面を想定して行われる。たとえば、帰宅したら手洗いうがいをする。普段の歯磨き、十分な睡眠、入浴（あるいはシャワー）、着替え、洗濯などの日常生活の「当たり前」のことがらを学び、習慣化していく。

知識は教科書からだけでなく、擬似的な体験や遊戯的状况でも繰り返して提供されていく。学年を問わず、児童がまとまって参加し得るシミュレーションやゲームのような方法は、楽しみながら学ぶことができるという点で、教育的有用性が高いことはすでに示されている。そして日常的な学びに加えて、インフルエンザなど、季節によって流行する疾患への対応なども適宜紹介されたりする。

児童生徒は繰り返しの学習をとおして、自分の体調や生活の仕方を見直す力を身につけることになる。つまり、習得した知識が身体化され、児童生徒の具体的な日常生活の中で実践されていくことになる。これにより個々人の健康への意識を高めることができると考えられるのである。これは、健康に関する知識と実践する力というヘルス・リテラシーの向上につながることになる[鈴木 2017]。

こうした認識に基づいて、筆者の研究グループは幼児から小学校低学年児童生徒の学びにつながる健康教育教材の作成を試みている。2017年9月パキスタン・イスラム共和国（以下パキスタンと記す）のパンジャブ州の州都ラホールにある小学校において、その準備的素材を用いて健康教育の試みを行った。本稿は、その報告である。以下ではその試用の過程と、そこで浮かび上がった課題を紹介する。

¹ 静岡大学防災総合センター客員教授（日本赤十字九州国際看護大学・大学院）

2 パキスタンの教育事情と教材を試みた施設

2-1 教育事情

今日のパキスタンの教育制度は、2009年に策定された教育政策に依拠している[Siddiqui 2016:17, 43, 61-62]。2010年改正憲法の25条A項では、5歳から16歳までの教育の無償化が定められている。これを定めた背景には、初等科教育の普及と成人教育をととして識字率を向上させようとする政策的意図がある[ibid. 61]。

黒崎によれば[2013]、パキスタンの学制を日本にあわせて表すと5 + 3 + 2 + 2になる。具体的には義務教育初等科前期（日本の小学校1年から5年に相当）が5年、後期（同、小学校6年から中学校2年までに相当）は3年、そして中等教育の前・後期（同、中学3年から高校3年まで）がそれぞれ2年間である。この学制の下で運営されている学校は、大別すると、公立学校、私立学校、そして国教であるイスラムに基づく教育を施す学校の3つがある[黒崎 2013:9-10]。

パキスタン政府統計局の年次統計資料[Pakistan Social and Living Standards Measurement 2014-2015: PSLM 2014-15]では、初等教育前期（小学校1年から5年）に相当する6歳から10歳の全児童のうち、年齢に相応する学年に実際に在籍している割合（パキスタンではNet Enrolment Rates[NER]と呼ばれており、黒崎[2013]は「純就学率」と訳している）は、パキスタン全土では67パーセントである。この率は州ごとで異なり、最も数値が低いのは55パーセントのバルチスタン州、そして高いのはパンジャブ州の72パーセントである。さらには都市と非都市部という分け方では、都市部ほど就学率が高く、性別では男子の方が女子よりも就学する傾向にある[PSLM 2014-2015:10-12]。

識字率に目を向けると、10歳以上の人口では全国の数値は60パーセント[ibid.16]、そして州ごとではバルチスタン州が44パーセント、そしてパンジャブ州が62パーセントとなっている。また、就学率同様に都市と非都市部では都市部ほど、男女別では男性の方が高い数値を示す傾向にある。

2-2 教材を試みた施設

パキスタンは4つの州と2つの連邦直轄地域を持ち、その人口は2億人を超える[Sixth Census of Pakistan 2017]。その中で、パンジャブ州は最大の人口（1億1000万人余）を擁し、州内には36の県がある。当初の計画では、かつて環境保全教育教材にかかわる調査を実施した農村地区の小学校を訪問し[鈴木 2013, Kikkawa and Suzuki 2013]、そこで教材の試用をする予定であった。しかし、現地での調整や協力者の都合から、今回の教材を試用する機会を得たのはパンジャブ州の州都ラホールにある私立小学校であった。ラホールは1,100万人を超える人口を抱える大都市である。

この小学校はラホール市域のほぼ中心部に位置している。校地のすぐ横を幹線道が走り、1日をととして交通量が多い場所にある。この地区の住宅の敷地はおおよそ1区画600平方メートル程度あるらしく、学校の大きさは、3つの住宅の区画をあわせたぐらいである。教室は、それらの区画にそれぞれもとからあった住宅の間を増改築したようにしてつながっている。敷地内には運動場は併設されていない。

教材の試用に立ち会ってくれた学校関係者によると在籍児童数は250から300人である。この中には小学教育以前の幼児も含まれている。児童生徒数の数字に幅があるのは任意の時期に入学を受け入れるからである。

試作した教材はこの施設の1年生レベルを対象にして試用した。協力してくれた生徒は25名で、男子生徒13名女子生徒12名の構成であった。これらの25名の生徒は4メートル弱×4メートル弱ほどの、和室に当てはめた言い方をすると8～10畳程度の広さの教室で学んでいた。民家を転用した施設であるため、教室の1つひとつが狭いようであった。

この教室の生徒たちは男女共学で学んでいる。筆者にはこれが少々斬新であった。というのもパキスタンでは、宗教的理由から男子校と女子校がきちんと分けられていることが多いからである。実際、筆

者が訪問したこの学校の近辺には複数の学校がある。それらは例外なく性別ごとに運営されている。女子校の校門前には警備担当者が配置され、訪問者の確認がなされている。この傾向は、非都市部になるとより顕著で、男子校と女子校は厳格に分けられている。女子校ではもちろんなのだが、共学校でも、訪問者が男性の場合、訪問時の挨拶で女性教職員が握手で迎えてくれることはない。

3 試作教材

パキスタン訪問に際して2つの教材を用意した。1つは、虫や昆虫の写真を印刷したカードで、他方は日常生活での活動や行動で健康や生活習慣にかかわる事項をイラストで示したものである。今回の試みでは、前者を虫カードと呼び、後者のイラストカードは単にメモカードと呼ぶことにした。それらについては、以下で説明する。

3-1 虫カード

虫や昆虫の写真カードを作成したのは次の理由である。一般的に、感染症は虫や昆虫が媒介することが多いので、生徒たちが虫や昆虫をどれくらい知っており、それらを区別することができるかを確認してみようということである。

国立感染症研究所などの公的機関が提供している情報を参考にして50の虫や昆虫の写真を収集した。イラストではなく写真にしたのは、研究チーム内での打ち合わせのなかで、児童に虫や昆虫を区別してもらうような教材ではリアリティがあるべきだという判断に達したからである。

収集した写真に示された虫や昆虫は、それらがもたらす害に応じて大きく3つの範疇に分けた。それらは、感染症を媒介し人体に影響（＝人間の健康を害）するもの（たとえば蚊やハエ）、不快に感じさせることが多い虫や昆虫（ゴキブリなど）、財産や農作物などに影響を与える虫や昆虫（シロアリやイナゴ）である。

学習では、これらのカードを参加者が3つの害に分けていくことになる。分けるという特徴から、虫カードを用いた学習を便宜上「虫分けゲーム」と呼ぶことにした。

虫カードでは大小2つのサイズを用意した。大きいサイズはB5版（25.7cm×18.2cm）の写真印刷用紙で、1枚に1つの虫（あるいは昆虫）を印刷したものである。小さいサイズは名刺判でおおよそ10cm×5cmの大きさである。これらのカード各1枚に、1つの虫（昆虫）の写真を印刷した（図1参照）。

2つのサイズにしたのは、教室環境によって生徒全員をまとめて対象にする場合と、生徒をグループごとに分けて進行する場合があると想定したからである。それらを説明すると次のようになる。

全員をまとめて対象とする場合には、まず生徒一人ひとりにカードを1枚ずつ配る。そして、参加者は順に自分の手持ちのカードを他の参加者に見えるようにして、印刷された虫（あるいは昆虫）がどのような害を与えるのかを口頭で発言し、そのカードを当てはまる範疇の箱の中においていく。

小さいカードで名刺判サイズの場合には、2つの運営方法を想定した。1つは数名単位で参加者を複数のグループに分けて行うグループ対抗戦の運営である。各グループの真ん中に、虫カードを広げておく。そして開始の合図で、各グループの参加者がカードを3つに分類していく。全部分類した時点で「終わり」といって作業の終了を宣言する。すべてのグループが作業を終えた後、進行役が正解を示す。これに並行するように各グループは自分たちの分類がどれほど正解だったかを確認していく。それによって、正解しているカードの数によってグループごとに競うことができる。

もう1つの方法も進行の単位はグループである。第1の方法と異なるのは、参加者各人が上記で示した3つの害を示した入れ物を与えられており、それに虫カードを分類して入れていくという運営である。競うのは正解数、つまり各人が手にする正解のカードの数ということになる。

なお、蚊の種類によって媒介する感染症は異なるが（たとえば、マラリアを媒介するのはハマダラカ、

デング熱はネッタイシマカやヒトスジシマカである)、作成した虫カードには複数の蚊の写真を採用しているが、感染症ごとで虫や昆虫の区別はしていない。

3-2 メモカード

このカードの前提となっているのは、邦語でトランプとよぶカードを用いたゲームでの神経衰弱と呼ばれているものである。神経衰弱は、すべてのトランプカードを机上や床あるいは畳の上に裏返しておき、ゲームの参加者が順にカードを2枚表向け、同じ数字を当てていくというルールで行われる。同じ数字のカードを当てると、参加者は、それらの2枚を手元に置いていき、最終的に獲得したカードの枚数で勝敗が決まる。実は、このようなカード合わせのゲームをメモゲームと呼ぶ。

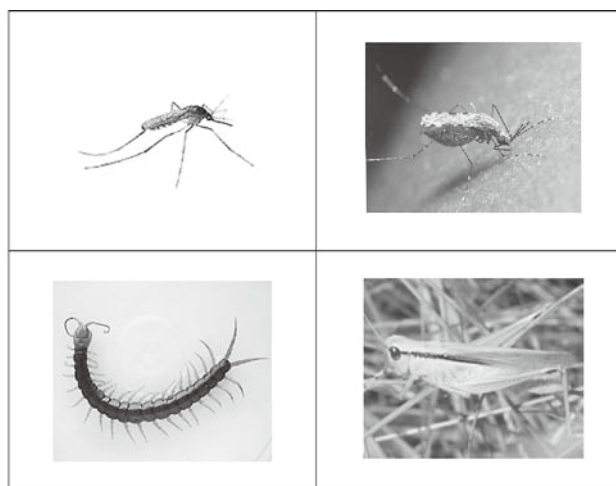


図1 虫カードの例
(注：1つの絵がB5サイズ用の紙に印刷されている)

日本では、神経衰弱つまりメモゲームでは、トランプにある2枚の数字カードの組み合わせゲームというように考える傾向にあるが、組み合わせられるカードは3枚でも4枚でも可能である。また、カードに限らず、石や布地をカード代わりにすることもできる。組み合わせは、合同あるいは相似の関係でもかまわないし、因果関係のような組み合わせでもかまわない。大事なことは組み合わせになる(カードや事物の)関係が相互排他的になっているということである。この組み合わせゲームを応用するというで、今回用意したイラストのカードをメモカードと称したのである。

今回は教材の試用が目的であったため、カードは健康保健や衛生にかかわる市販されているイラスト集に収録されているもののなかから図柄を選択して利用することにした(図3参照)。注意したのは、国の経済力や文化差にあまり影響を受けない日常のことがらに焦点をあて、それをできる限り端的に示しながら小学校低学年児童に通じやすい単純なイラストを選ぶことであった。しかし、選ぶとしたイラストの多くには漫画に登場するような人物像が描かれている。宗教によっては偶像崇拝が禁じられている。そのような場合イラストといえど人物像の使い方を考慮しなければならない。イスラム教が国教と定められているパキスタンでは、試作したカードがどのように受け止められるか判然としなかった。イラストの使用について現地で注意を受けた時には、あくまでも児童の健康保健衛生にかかわる教育目的だということを説明し、釈明することにした。

虫カード同様に、メモカードも大小2つのサイズを用意した。その理由は虫カードと同じで、教室全体を対象とする事態と、生徒たちを複数の小グループに分けることがあることを想定したからである。

メモカードの使い方を示しておく。大きなカードを用いた場合、教室の前でゲーム進行者が1枚のカードを掲げる。たとえば、朝日と目を覚ました児童のイラストだとする。進行者は、生徒たちに「朝目を

覚ましたら、何をしたらいいのか」と口頭で尋ねる。この質問に対して、生徒たちは挙手をして（これが競争という意味でゲームとなる）進行者の指名を得るようにする。そして指名されると、すべきあるいは、行った方がよいと思われる行動を答える。正解であると、進行者はそれが描かれたカードを示し、2枚のイラストの組み合わせを明らかにする。不正解の場合は改めて生徒に挙手を求め、回答を促していくことになる。

小さいサイズの場合には、参加者を4～6名からなるグループにわけて、そのグループの真ん中にカードを裏返して置き、トランプの神経衰弱と同じ要領で進行することになる。

小さいサイズを用いたメモカードと虫分けゲームはほぼ同じような手法で運営することが可能である。メモカードの場合には、組み合わせたカードの数をめぐり、グループ内での参加者が個々に競い合うことになる。

4 実際の教室から

教材試用のための現地を訪問したのは、本稿の報告者だけであった。2つの教材の大きいサイズのカードだけで合計100枚を越えており、それらを初対面の生徒たちに限られた授業時間内に1人で提示し生徒の対応を注視しながら記録していくことは容易ではないと思われた。そのため教材試用については、この学校の管理職教員に協力を請うことにした。幸い、その要請を受け入れてもらえたので、今回の試みの説明とカードの提示を当該教員に依頼することにした。教壇には、この教員と報告者であるわたしが並んで立つことになった。

教員は、教材を持ち込んだわたしの紹介をしてくれた。用いられている言語は英語で、生徒が知らなさそうな難しい単語になるとパキスタンの国語のウルドゥー語が混ざった。まず、来訪者のわたしの紹介がなされた。日本から来たという言葉が発せられたとき、生徒たちは一様に歓迎の声を上げてくれたが、かれらの大半は、日本がどこにあるのかはおそらく知らないだろう。その後生徒の代表からはわたしの来訪を歓迎するという意味で、小さなブーケの贈呈があった。儀礼交換のあと教材試用が始まった。

虫分けゲームを最初に行うことにした。生徒たち全員に用意してきた虫（昆虫）の写真が印刷されているB5サイズのカードを無作為に1人に1枚ずつ配った。生徒数が25であるから、用意してきた半分を配ったことになる。

カードが行き渡ると、教員がゲームの趣旨を説明してくれた。それは、「みんながもらったカードにある写真を見て、それが①病気を持ってくるか、②気持ち悪いだけか（不快感という言葉は避けた）、③畑の作物を食べてしまうような悪さをする、のどれに当てはまるか知っていますか？わかったら、前に①は赤、②は黄色、③は緑の丸が書いてある紙を置くので、その上に重ねていってください」というものだった。

教室後方に座っていた生徒から回答が始まった。生徒は立ち上がり、自分の意見を発言して、それを教室の前に持ってきてカードを番号と色つき円の描いてある紙の上に置いていくことになった（図2参照。個人の同定を避けるために、写真の解像度を低くしている）。

教員の説明や質問に生徒はきちんと理解を示していたが、この種の教材が初めてだったようだ。加えて普段見たことがない人物（報告者のこと。初老の男性であることなどさまざまな要因があったと思われる）が目前にいることが生徒たちには戸惑いを与えているように思われた。また、狭い教室に25名もの生徒を収容していることもあり、机と机の間の通路を使って教壇近くまで移動し、自分のカードを区分けした場所に置くというのは想像以上に時間がかかった。そのため5人目くらいからは、生徒は口頭で回答した後、自分のカードを前に座っている他の生徒に手渡して、教員もしくはわたしの手元まで送られてきて、生徒の回答に合わせて区分していくようになった。



図2 虫分けゲームで回答している生徒
(撮影：鈴木清史 2018[個人保護のため写真の解像度を低くしている])

25の回答のうち、ほぼ7割のカードが③畑の作物をたべてしまうという区分に入れられた。それ以外は、無回答か気持ちが悪い、そして蚊だけが(つまり1人)、①の病気を持ってくるという区分を示す結果となった。

虫分けゲームが一巡した後、メモカードを試みた。この教材も、教室環境からB5サイズ版のカードを生徒たち全員に同時に提示し、挙手によって回答を得る形式をとることにした。その際、生徒たちには、カードに描かれているイラストについて説明するようにした。たとえば、歯磨きをしているカードを提示したときには、進行役は「歯を磨くと何がいいのかな」という補足説明をし、掃除のことを尋ねる場合には、「あれっ、部屋が汚れてきたね。どうしようか」と台詞を述べたりした。

授業時間を守る必要があったため、このカードゲームでは、5組の組み合わせの試みで終わった。それは最初の虫分けゲームで手間取り、時間がかかったからである。5つは歯磨きときれいな歯、汚れた台所と掃除、バイ菌と手洗い、うがいと咳、発熱とその対応、であった。教員は、「きれいな歯にするには」と尋ねると、「歯磨き」と返答があった。また、「台所が汚れたら」という質問には「掃除」という回答があった。そして「手を洗ってきれいにするのは」という問いには、「食事の前だから」という返答があった。食べ物を口にする前に手を洗う(清潔にする)ことはわかっているようだった。しかし、うがいと咳そして、発熱とその対応の関係については生徒たちのほとんどがわからなかったようであった。

5 試みから明らかになったこと

虫カードを使ったゲームでは、7割の生徒が自分に与えられているカードに描かれている虫を、畑の作物を食べてしまう、という分類にした。生徒の様子を見ていてわかったのは、生徒たちは確信があってそのように答えたわけではないということである。虫分けゲームは、教室後方に座っていた男子生徒から始まった。この生徒の手元にはイナゴの写真があった。かれは進行役の教員の言葉を受けて、自分のカードの虫は畑の作物を食べてしまうと答えた。そして、かれに続く生徒たちは、最初の生徒に続くような答えをしていった。変化が起こったのは、蚊の絵をもった生徒になってからである。この生徒が、蚊を示して人間に病気を持ってくる、と答えたことで、後に続く生徒の回答が一樣ではなくなった(とはいえ、生徒の大半は写真の虫を理解しているようには見えなかったが・・・)。

こうしたことから、虫についての知識があるかどうかを調べようとした、この虫分けゲームは意図していた展開には至らなかったといえる。

健康保健や衛生にかかわる意識や知識についてのメモゲームで試みることができたのは5組だけであった(図3)。「歯を磨くときれいになる」、あるいは「歯をきれいにするには磨く」というつながりや、「汚れたら掃除する」「掃除をするときれいになる」という連関については、生徒たちから間髪を開けずに反応があった。それぞれに組み合わせるイラストカードを提示しても、納得するような表情を示していた。

ところが、手洗いになると、その意義を理解していても、バイ菌のつもりで提示したイラストが、生徒にはバイ菌だと受け止められなかった。かれらは、イラストが何を示しているのか想像もできなかった。同様に生徒たちは、うがいや発熱を示すイラストに見られる意味は理解したようなのだが、それと対になるはずの咳の図と解熱のために冷やす身体の場所を示した絵の意味がわからなかった。これは、かれらが、もともと知識を持っていなかったこと、また2つの要素の排他的関係が曖昧であったことが要因だったように思われる。



図3 5つの組み合わせ

注：上下の絵で1組になる。左から歯磨き、台所掃除、手洗い、うがい、発熱の順。

授業が終わった後、進行役を務めてくれた教員とこの学校で行われている健康保健衛生にかかわる指導についての情報提供を受けた。この教員がまず触れたのは、ラホールのような大都市に住む生徒たちの多くは、虫や昆虫を身近に感じることは少ないのではないかということであった。この教員は、世界中どこでもいそうな蚊やゴキブリそれに、ムカデなどについては生徒たちも知ってはいても、それ以外の昆虫のことはわからないように思う、といった。つまり、都市生活者としての傾向だということである。

たしかに、農村地域と比べるとラホール市域の中心部では虫や昆虫を見ることは少ない。この学校が位置している市内中心部では農地があるわけでもないので、作物を狙う虫を見かけることもない。それに、マラリアやデング熱に対処するためか、ラホール市域では、夏の夕方になると大規模に殺虫剤を散布する光景に出くわすことがある。そうした意味で、ラホールは農村地帯と大きく異なっている。

虫の区別に関して教員がさらに続けたのは、生徒の保護者は都市生活を営んでおり、大半はホワイトカラーの職にあるらしいということである。こうした人びとの中には、農村地域出身者もいるようだが、かれらは出身地では小作人を使用している側の人びとであることも多いので、虫や昆虫に触れる機会は少ない階層に属している傾向にあるということである。

健康保健衛生にかかわることについて、教員は、学校では、低学年の保健衛生の指導を大切な教育項目にしている、と教えてくれた。教員によれば、毎朝ではないにしても、生徒たちの指先（爪）、朝のシャワーそして身なり（制服がある）については、担当教員が確認しているとのことであった。また、生徒たちについて、教員が気づいたことがあれば、保護者に都度連絡し、監督を依頼しているということであった。こうしたことができるのは、この学校が私立であるということ、そして月額（約20米ドル）の授業料を負担できる家庭背景の子弟が学んでいることがあるだろうと教員は語った。

6 今後の課題 —まとめにかえて—

今回教材の試作品を準備する段階で、研究グループでは、日本で手に入るイラストがパキスタンの児童生徒にどれほど受け入れられるかどうかということが検討された。その理由は、過去のパキスタンでの経験（2010）では素材の現地化（localization）の必要性が明らかになっていたからである [Kikkawa and Suzuki 2013]。

ここでいう現地化とは、1つは現地での生活に密着した要素や素材を用いることであった。たとえば前回は、雨が降れば長靴とレインコートという関係を示すイラストを示したことがある。これらを日本の児童に教えるのは難しくないはずである。ところが、それらの雨具を着用しない地域では伝わりにくいメッセージである。また、前回は地震とナマズの絵を示したが、このつながりはまったく理解してもらえなかった。当たり前なのだが、パキスタンでは、ナマズが地震を引き起こすなどということをいわないからである。日本で通じる喩えや図柄で表象されているイメージが、他国では通じないことが多いということである。

一方、他の点での現地化とは、それぞれの国や地域で異なるだろう図柄、イラストやそれに付随する色調などの好み、そして文言にかかわるものである。それらが表象する意味が、日本では通用しても他の国や地域で同じようには通じないことがある。宗教的要素も現地化において重要な要素である。

こうした経験から、今回の虫カードではイラストではなく写真を用いたのである。しかし、教室での試みからは、都市部と非都市部という地理的相違がもたらしている環境要素を考慮して教材を用意する必要があるということがわかった。また低学年層の児童生徒では、最初に示された回答の影響力が大きいということも明らかだった。児童生徒の、このような反応への対応としては、虫や昆虫がもたらす害に応じて虫カードを区分していくという方法ではなく、もたらす害を前提にして、（それぞれ異なる）虫や昆虫の組み合わせを発見する、というメモカードのやり方も可能であることが想像できた。

健康保健衛生にかかわることがらに焦点を当てたイラストは、歯磨きや掃除という日常生活の事項と、それらをわかりやすく示している図柄を選んだ。これらの中には人物像が描かれているのが多くあったため、宗教的理由から受け入れられないのではないかと心配したが、それは大きな問題とはならなかった。理由の1つは、パキスタンでも幼児児童らの間ではアニメや漫画が流行しており、イラストには慣れているだけでなく、児童もそして大人も受容しているからだった。実際に、筆者が2012年にラホールを訪問した時と比べても、もっと多くのイラストや漫画そしてテレビではアニメを目にするようになっていた。現地での研究協力者の家族からも、昔と比べると日本の漫画やアニメはパキスタンでも人気を呼んでおり、子供たちの間への浸透度はきわめて高いと教えられた。そして今回ラホール市内の書店を訪問したとき、書架の1つが床から天井まで日本の漫画で埋め尽くされているのを目の当たりにした。イラストが偶像提示と受け止められないかという、教材試作品準備段階での心配は解消された。その点では、今後の教材開発において、イラストを用いることができるのを確認することができた。そして、日本の児童を対象にしているイラストも受容されることがわかった。一方で、現地好みとなるようなイラスト、絵が物語の意味合いにかかわる情報は、今後さらに調べていく必要があることが改めて明らかになったといえる。

謝辞：

本研究は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究（C）（一般）（平成28年度～平成30年度）[課題番号16K01298 自己啓発型ヘルス・コミュニケーションツールの開発と評価]（代表：鈴木清史、分担者：吉川肇子[慶應義塾大学教授]、堀井総子[国立保健医療科学院主任研究官]）によって可能となりました。助成に感謝いたします。

引用・参考文献

- 黒崎 卓 2013 「パキスタンの教育制度の特徴と課題」 科学研究費・基盤研究（B）[南アジアの教育発展と社会へ尿（代表・押川文子）最終報告書原稿（http://www.ier.hit-u.ac.jp/~kurosaki/Kurosaki_PK_educ1303.pdf）
- 鈴木清史 2013 「3つの試みからの学びー環境教育ツール開発の経験からー」 *Asian Studies*『アジア研究』 Number 8（第8号2013年）:45-53、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター
- 2017 「パキスタンにおける健康課題とヘルス・リテラシーの可能性」 *Asian Studies*『アジア研究』 Number 12（第12号2017年）:41-50、静岡大学人文社会科学部アジア研究センター
- Kikkawa, T. and Suzuki, S.
2013 Localization of Risk Communication Tools: Two Case Studies, *Journal of Disaster Research*, Vol.8(1):90-94.
- Siddiqui, S. 2010(2007 first edition) *Rethinking Education in Pakistan: Perception, Practices, and Possibilities*, Paramount Publishing Enterprises, Karachi.
- 2016 *Education Policies in Pakistan: Politics, Projections, and Practices*, Oxford University Press, Karachi.

資料など

- 日本健康教育学会 <http://nkkg.eiyo.ac.jp/hehp.html>
- ブリタニカ国際大百科事典 小項目「健康教育」
- 文部科学省 学習指導要領（http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sou.htm）
- パキスタン政府統計局 Pakistan Social and Living Standards Measurement 2014-2015: PSLM 2014-15
Sixth Census of Pakistan 2017